

岐阜支部

ちようちん

2013年7月号

全国障害者問題研究会岐阜支部 〒500-8879 岐阜市徹明通7-13 岐阜県教育会館401

TEL/Fax 058-253-7033 Email zenshouken_gifu@yahoo.co.jp

「劇団ドキドキわくわく」主催 演劇と学習の集いに参加して

6月30日、「劇団ドキドキわくわく」主催による『僕たちだって幸せになりたい第2弾～障がい者が性犯罪に巻き込まれないために～』が岐阜市日光コミュニティーセンターで開催されました。第一部は劇団による演劇発表「ハッピーバースデー」、第二部は公開授業「続・タッチの学習」、そして第三部は伊藤修毅氏による講演「障害のある青年の性と生～学校教育終了後の性教育の継続」という三部構成で行われました。スタッフ含めて170名の参加で（遠くは大阪・京都からの参加もあり）、会場はおおいに盛り上がりました。NHKの取材もあり、カメラが回るなかでの本番でしたが、劇団の仲間たちはいつも以上に張り切って取り組んでいました。あらためて劇団および支援者の会（ひまわり）のパワーの大きさを見せつけられました。

この劇団の活動にボランティアとして参加している岐阜大学地域科学部の学生さんから、当日の感想を寄せていただきましたので紹介します。

演劇「ハッピーバースデー」を鑑賞して

岐阜大学地域科学部4年 奥田幸子

毎週日曜日に仲間たちが集まり稽古を続けている演劇活動に、私は本番を目前に控えたころ初めて参加させてもらいました。仲間たちは、恋人や友達に対するうれしい気持ちや悲しい気持ちを言葉や動作でうまく表現するために何度も何度も納得のいくまで練習していました。私が想像していたより

全国大会 in 岐阜 2015 第4回準備委員会のお知らせ

日時：2013年8月3日（土）15：00～18：00（終了予定）

場所：岐阜大学地域科学部5階 心理学講義室

内容：第1部 学習会 担当：白木一夫さん（～16：00）

第2部 準備委員会 大会グッズ用ロゴマーク等の公募について

青森大会参加のときにチェックすること 他

も厳しくかつ細かい演技指導が飛び交う稽古場の雰囲気にもまず圧倒されました。そして、指導者からの指示に真剣な面持ちで応えている仲間の姿がとても印象的でした。

本番当日、会場には多くのお客様が来場されました。直前のリハーサルでは声の小ささを何度も指摘されていた仲間も、自分の持ち場を離れてうろうろしていた仲間も、本番ではステージの上で堂々と大きな声で自分の役割を演じきり、一生懸命がんばってきた稽古の成果を発揮することができたと思います。カーテンコールで大きな拍手をもらう仲間たちの生き生きした笑顔は充実感に満ち溢れていました。本番が終わった後に「とても楽しかった」と私に笑顔で話しかけてくれる仲間もいました。

こうした日々の稽古の継続と本番での達成感が多くの仲間たちの自信につながっていくのだとしみじみ思いました。私はこれからも日曜日の稽古に参加させていただきます。今後、仲間たちと活動を共にしながら私も仲間たちと一緒に成長していきたいと思いました。



公開授業「タッチの学習」を参観して

岐阜大学地域科学部4年 神谷 早紀

「タッチの学習」では、渡辺武子先生が教師役となり、生徒役である劇団の仲間たちと「異性の触れてもいいところ、いけないところ」の確認から始まりました。その後、好きな相手のからだに触れる際に「同意をとる」ロールプレイが実際に行われました。劇団の仲間たちは自分の好きな相手を指名し、抱き合えるという機会にも臆することなく「自分がやりたい！」と武子先生にアピールしていました。その中でも印象的だったのが、好きな相手からの「抱きしめてもいいですか？」の問いに対して、断る役を引きうけざるをえなかった仲間が、どうしても断れず、「いいですよ」と答えてしまったところでした。そのとき、自分の気持ちに素直なんだな、本当に相手のことが好きなんだなという気持ちがとても伝わり、会場も笑顔に包まれました。

参観されていた20代、30代、そして50代の方へ「抱き合うときに同意をとっているのか」というインタビューも試みられました。そこでは、「相手の表情をみて判断することもある」「お互いが好きであるから同意をとらないこともある」という意見がでました。仲間たちがこの意見をどう感じとったのかとても気になりましたが、きっと大好きな人を思い浮かべて自分はどうするのかを考えていたのではないかと思います。

今回の授業を拝見させていただき、障がい児者にとってこのような授業が重要であること、また障がい児者に限らず、すべての思春期子どもたちにとってこのような授業を受ける必要があると強く思いました。なぜな



ら、知りたいけれど、自分から聞きづらい内容をみんなでも学習できるのはとても素敵なことだと思ったからです。



発見!“発達保障”～from Fresh Eyes～



☆4.『問題行動を発達要求としてとらえる』って言うけれど…！？☆

若井 基一

今回のテーマは、「問題行動を発達要求としてとらえる」というものです。私が支援員をしている障害福祉サービス事業所「ポップコーン」に通う仲間の一人である朗（あきら）さんに登場してもらって、この問題について考えたいと思います。

朗さんは人が大好きです。人とじゃれあって遊んでいるときの笑顔はとても素敵です。言葉を発することはありませんが、指さしや行動で職員や仲間に働きかけることができます。また耳にした言葉の理解度はすばらしく、日常的な会話の内容であればほぼ理解して行動できます。身体を動かすことに問題はありません。

そんな朗さんがポップコーンの職員を悩ませている行動、それは他の仲間をひっかくことです。基本的には穏やかで、他の仲間にも友好的にかかわろうとする朗さんですが、自分のしたいことと異なることを無理にさせられた直後や、食事の時間には不安定になり、仲間の腕などをひっかいて傷を負わしてしまうことがあります。

今までにも何度となく朗さんの「問題行動」について職員会で議論してきました。議論する前には、朗さんが他の仲間を傷つけないように職員は自然と朗さんとの間合いを近づけ、腕をとるなどしてやめさせようとしていました。でも、話し合っていく中で、この間合いの近さが朗さんのストレスになって余計に不安定にさせているのではないか、少し空間的な「間」をあけたほうがいいのか、という考えが出てきました。また、朗さんがイライラしているとき、朗さんの好きなくすぐり遊びを取り入れると気分転換になって治まったという経験から、こういうふうにして気持ちを切り替えてもらったらい、という意見もありました。他害の頻度が高くなってくると、朗さんは他の仲間から離れたところで食事をとってもらったほうがいいのか、作業もなるべく人数の少ない落ち着いた雰囲気作業グループに変わったほうがいいのか、という提案もされました。

これらは、確かにもっともな対応策だと思います。実際にやってみて「問題行動」がある程度抑制されました。また、もし朗さんを他の仲間から離すと、他害が少なくなることは容易に想像できます。

しかし、もし職員集団がこういった対応をすることに終始するのであれば、それは「対症療法的」といわれるものになるのではないのでしょうか。「問題となる行動がでなければそれでいいのだ」という考えに基づいて朗さんを管理するための存在になってしまう、そんな職員が増えていくでしょう。職員にとっての朗さんとの活動の目的が、「朗さんの表面的な行動を変えること」になるのです。

そして実際、上記のような「対症療法的」対応をしても、朗さんの他害が抑制はされるものの、なくなることはありませんでした。また、他害を受けた仲間やその保護者にこの問題に関して動揺が広がっていききました。朗さんとの付き合い方を職員それぞれの経験や個性・感性に任せる部分のあった私に対して、「どう対応すればいいのか、はっきり示してほしい。対応の仕方を統一したほうが朗さんの安定にもつながるのではないか。」と他の職員からの不安に満ちた訴えがありました。朗さんのお母さんの罪悪感も切実なものになりました。

そのような中で、私はもう一度朗さんの「問題行動」にまっすぐ向き合い、それを「発達要求」としてとらえてみようと思いました。

ただ、「発達要求としてとらえる」とはどういうことなのか、しっかりわかっていない私はいくつかの文献をあたりました。そして次のような言葉を見つけました。

「子ども（仲間）は決して、教育（実践）の『対象』ではない。まさに、喜んだり、悲しんだりする、『発達の主体者』なのだ」

「私たちに求められるのは、『問題行動』をなくすことではない。その子自身の中に、『問題行動』から立ち直る力を育てることだ」

「応答的・共感的な人間関係が（仲間の）意欲を育む」

「私たちの人間を見る目の育ちに依じてしか、子どもたちは見えてこない」

「真の子ども発見は、教師（支援者）の自己否定・自己変革をとまなう」

「『問題行動』そのものの善悪の価値判断はひとまずさておいて、なぜそうした行動をとるのか、をさぐるとうとする。」（以上、竹沢,1992（）内加筆）

「『問題行動』が激化すれば、毎日の実践は追い詰められていく。速攻の対症療法がほしくなる。しかし、困難なときほど、原点に立ち返ることが大切だ。障害があろうとなかろうと、その人が何を願っているのか、それを考えながら実践を進めていきたい。」（三木,2011）

これらの言葉に出会っても、またその後数日間朗さんにつきあっても、私には朗さんの本当のねがいは見えてきません。まさに「人間を見る目」が育っていない証拠です。善悪の価値判断を抜きにして、朗さんがなぜそのような行動をするのか、どんなに時間帯に、どんな集団の時に、どんな活動の中で、どんな働きかけの時に起きるのか等をいねいに観察・分析する必要があります。こういったことは今まで私がやってこなかったことで、これまでは気づかなかった朗さんの一面が発見できるのではないのでしょうか。

また、私ひとりで見つけようとしてもうまくいかないでしょう。職員集団で話し合い、考え合うなかで発達の主体者である朗さんのねがいが見えてくるのだと思います。私や職員集団にとっての発達観の確立も、大変重要な意味をもってくると思います。そういった目標を目指して、真摯に取り組もうと決意しています。その結果や状況の報告は、また後日させていただきます。

参考文献

竹沢清（1992）『子どもの真実に会おうとき』pp.103-130 全国障害者問題研究会出版部

三木裕和（2011）「〈問題行動〉が問題になるとき」『みんなのねがい』533号 pp.32-35

はあー？～病弱養護学校物語～4

近藤博仁 作

よしまさ
美賢

学部制になって、あかしあ病棟で生活するぼくたちの生活が大きく変わりました。一番の変化は、聡志くんたちあおばの子と教科の勉強をするようになったことです。勉強が始まって、ぼくは社会科が好きだということが分かりました。新聞を読んだり、ニュースを見たりするのが好きだったせいかもしれません。

模擬テストも受けることができ、ぼくの実力がどれだけかということも分かるようになりました。ちょっと自慢ですが、この間は五教科で四百点以上取ることができました。

試験会場の雀谷高校はエレベーターがなかったので、安西先生と西川先生にお世話になり、電動車いすを持ち上げて二階まで運んでもらいました。八十キロもあるんです。パワフルな頼りになる先生たちです。

宿泊訓練や修学旅行などの行事も一緒です。修学旅行はサンシャイン水族館、ディズニーランド、霞ヶ関ビルなどの見学をします。聡志くんから聞いたのですが、去年は計画外の行動もあったようです。

こうして、五月、ぼくたちは東京へ修学旅行に出かけたのでした。

バスの中で、お父さんが春田先生に何か言っています。ぼくのところは両親が付き添っているんです。あかしあの生徒は保護者が付き添い、あおばの子は生徒だけの参加です。

「先生、今年もありますよね」

「えっ、なんですか」

「臨時旅行ですよ。歌舞伎町行きの」

「はあー？」

と春田先生は、とぼけたのですが、

「去年の人から聞いてますよ」

お父さんにそう言われて、

「えーっ、知ってたんですか」

と言わざるを得なかったようです。

去年、先輩たちは、宿舎からタクシーに乗って夜の歌舞伎町に行ったそうです。お父さんはそれが今年もあるのだろうと、春田先生に念押ししていたのです。

「今年も行けっていうんですか」

と春田先生は不安そうな顔で返事をされていました。

今年は行けるかなー。一体歌舞伎町ってどんなところだろう。

「歌舞伎町といっても、飲みに行くわけではないですよ。ただネオン街を歩いてくるだけです」

「それでいいんです。もしかしたら、この子たちは一生そんな所には行けないかも知れないですから」

お父さんはそう答えていました。いいぞ、いいぞ。

春田先生が言い訳をし始めました。

「去年は、あかしあの子が親子で夜くつろいでいるのに、あおばの子は子どもたちだけでかわいそうで、歌舞伎町なら車で五分で行けるところだし、連れて行ってやるかと思って連れてったのですよ。あかしあの子や親御さんたちに黙っていくわけにはいかないので、こうこうこういう訳で出かけてきますと言ったら、私たちもついて行くということになってしまっただけで、結局全員で行くことになってしまっただけですが・・・」

「だから今年もお願いしますよ」

お父さんは押し切り、とうとう春田先生から「わかりました」という返事を勝ち取ったのです。

こうしてぼくたちは歌舞伎町に行けるようになりました。春田先生の言葉では、繰り出すということになるそうです。

歌舞伎町一番街のゲートをくぐるとそこは明るいネオン街でした。岐阜の柳ヶ瀬でさえ夜は歩いたことはありません。夜はだいたい病棟のベッドの上です。歌舞伎町とは、何をするとところかもよく分からない場所だったのですが、賑やかで、活気を感じました。

酔っぱらいがぼくたちの車椅子を器用によけていきます。なんでぼくたちが歌舞伎町にいるのか、尋ねてくる人はいませんでした。ふところが広いのか、単に無関心なのか、車椅子の団体でも特別視されないとこのようです。

コマ劇場というところからUターンしてすぐに西武新宿駅に戻りました。あとで地図を見るとほんのちょっとした距離でびっくりしましたが、ぼくにはものすごく移動したように思えました。しかも、ぼくはタクシーに乗るため電動車いすではなく宿舎の車いすに乗っていったので、かなり座りごごちが悪かったのです。

大変だったのは帰りのタクシーでした。なかなか拾えないのです。行きは宿舎に迎えに来てもらえばよいので、ちょっと待つだけでしたが、帰りは自分たちで拾わなければならないのです。しかも、LPG車のトランクは狭く、車いすを乗せると扉が閉まらないのです。それを承知で乗せてくれるタクシーを見つけるのがなかなか大変なことでした。

春田先生は「やっべ、帰れなかったら、首じゃねえの」と思ったそうです。だから必死で手を挙げてタクシーを捕まえ、事情を話していました。

ぼくたちは、そんなことは少しも気にかけないで、歌舞伎町という大人の街に来たことを単純に喜んでいました。

「あんなネオンや電気がいっぱいついてもったいないね」

と聡志くんが生活感いっぱいのことを言っています。

「お酒飲むって楽しいことなんやね」とぼく。

「そうやて、きっと楽しいと思うよ。大人になったら一緒に飲もうな」

「飲もうね。岐阜だけじゃなくて自分たちでここに来て飲めたらいいね」

「約束するか?」

「それはできない」

と、ぼくは答えた。電動車椅子のぼくが大人になって自分の力で東京へ来るということは想像つかないことだったから。

そんなことを言っている間に、タクシーがはつかまり、無事宿舎に帰ることが出来たのでした。

春田先生は汗びっしょり、疲れ切った表情でした。

ぼくたちは満足して眠りにつきました。

つづく （この物語はフィクションです）

ヘルパーさんと作る

カンタン料理レシピ^③

こもり じゅんこ

この料理は、ずっと前どこかの居酒屋のつき出しで食べたような気がします。私は、お店で食べてイける〜と思ったものを、つい家で作りたくなってしまいます。台所は私にとって、自由気ままな実験室なのです。

今回は、

ながいものソテー

=ヘルパーさんにやってもらうこと=

① ながいもの皮をむき、1センチの厚さに輪切りする。

=作り方=

② フライパンに、オリーブ油かバターかごま油を引いて、①を並べ両面を焼く。

③ 焼き方も2通りあり、強火でサッと焼くと表面がカリカリで中が半生になり、弱火でじっくり焼くと表面しっとりで中が少しもっちりになる。

④ お好みに焼けたら、味つけをする。

・だし醤油をかけ、からめる。花かつおや青ネギをトッピングする。

・酒と醤油を同量ずつ入れ、水分をとばしながらからめて、お好みで七味などふる。

- 塩こしょうでシンプルに。もしくはその上に、とろけるチーズをトッピングする。
- ニンニク味噌を薄くぬる。 等々

使うオイル、焼き方、味つけをいろいろ組み合わせると、さまざまなバリエーションが楽しめます…。

ヘルパーさんにながいもを切ってほしいと頼むと、はじめてのヘルパーさんは必ず、「これ、どうやって食べるの？」と不思議そうに質問します。私が調理法を話すと、みんな「私も家でやってみよ〜」と言ってくれます。

ある日、うちに来たヘルパーさんが「小森さんちのながいもの料理、ヘルパーのあいだでメッチャはやっとるよ」と教えてくれました。それからは、いろんなヘルパーさんと、自分がやってみた味つけなど教え合い、またみんな家でやってみるというやりとりの中で、この「ながいものソテー」は進化してきました。

こういうヘルパーさんたちとの交流が本当に楽しいです。これが、福祉サービスを活用して生きて行く醍醐味かもしれません。